文壇資料

軽井澤

小川和佑

講談社

文壇資料

軽井澤

小川和佑

講談社

著者略歴
小川和佑（おがわ　かずすけ）
昭和5年4月、東京目黒に生まれる。
昭和26年3月、明治大学文芸科卒業。
文芸評論家。日本文芸家協会会員
主著に「立原道造の世界」（講談社）「評伝堀辰雄」（六興出版）「文学アルバム・立原道造」（毎日新聞社）「三好達治の世界」（潮出版社）「伊東静雄論」（五月書房）「リトル・マガジン発掘」（笠間書院）その他がある。

©1980
KAZUSUKE OGAWA
第1刷　昭和55年2月28日

文壇資料　軽　井　沢

定価　1400円

著者　小川和佑
発行者　野間省一
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2—12—21
電話　東京(945)1111(大代表)
郵便番号　112　振替東京8—3930
編集　株式会社 第一出版センター
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社　黒岩大光堂

Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取替え致します。

0095—269933—2253(0)　(セ)

目次

Ⅰ プロローグ　軽井沢春秋　5
中山道・軽井沢宿／軽井沢物語／ひなぐもる碓日坂／ある夏・聖パウロ教会の弥撒で……／軽井沢の沿革史／聖歌の朝に……／明治の軽井沢／樅の木蔭――ショー師記念碑

Ⅱ 我は張りつめたる氷を愛す　31
犀星詩碑／沙羅の花／郭公の声――有島武郎の恋／三笠の森／麦藁帽子の夏／文学サロン・つるや旅館

Ⅲ 物語の女――芥川龍之介　62
作家のおもかげ／めぐりあい／むらぎものわがこころ……／越し人／秋風六里ヶ原／芥川龍之介の死

Ⅳ 『風立ちぬ』の世界へ――あるいは青春について　101
「ルーベンスの偽画」の少女／続「ルーベンスの偽画」の少女／絵はがきのなかの風景／犀星山荘／『美しい村』幻想／続『美しい村』

幻想／アカシアの並木／風立ちぬ、いざ生めやも

V さらば夏の光——三田派の人びと 131

戯曲「薔薇の館」と遠藤周作／丸岡明と軽井沢／『生きものの記録』／外人墓地・オーストラリア大使館など／堀辰雄と「四季」／犀星と信夫／さらば、束の間の夏の光よ

VI 中軽井沢と法政大学村——もう一つの軽井沢 154

西武開発と沓掛／中軽井沢の文学碑／星野温泉と詩人たち／白秋詩碑／法政大学村／岸田衿子と吉行理恵

VII 川端康成の軽井沢 184

『雪国』から『雪国』へ／桜沢・川端別荘／白い降誕祭／逆照射のなかの日本／『みづうみ』——戦後の軽井沢風景

VIII 信濃追分——立原道造の詩と青春 210

樹　下／村ぐらし／鮎の歌／追分慕情

IX 花の冠を…… 232

——カトリック詩人野村英夫の生涯

『雉子日記』の少年／立原道造との出逢いと別れ／堀辰雄詩集／孔雀の羽で……／花の冠を……／遙かな回想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

X　さまざまの夏　260
木の十字架／軽井沢の三島由紀夫／新しい出発――堀辰雄と雑誌「高原」／さまざまの夏――エピローグ
軽井沢文学年表
参考文献

装幀／森下年昭

I　プロローグ　軽井沢春秋

中山道・軽井沢宿

今年、五月の末に軽井沢駅のホームに降り立ったら、駅の構内の八重桜が満開だった。標高千メートルの浅間高原は春が、東京より一月遅れている。

軽井沢はこれからミヤマザクラから始まって、秋立つ日まで花の季節に入る。ことに梅雨の晴れ間の多い年は、この初夏の季節はそれこそ『美しい村』の季節になる。

この頃の夏のこの避暑地は、若い女性たちが全国から集って来て、古い軽井沢の性格を一変させてしまい、彼女たちを中心にした新しい観光地になってしまった。

夏休みになると、それを待ち兼ねたように若い娘たちがどっと繰り出して来て、軽井沢駅から、ロータリー、旧軽井沢のメーン・ストリートにかけて日曜日の雑沓のような人出が例年繰り返される。軽井沢のブームもここ数年すっかり定着してブームというよりも、それが夏のこの避暑地の常態になってしまった。——それでいて、やっぱりここにはほかの観光地と違った雰囲気だけは残っ

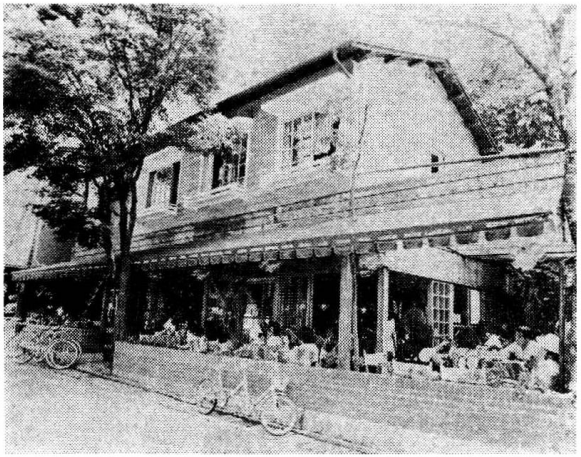
ている。

それはここが外国人の宣教師によって開発された別荘地だったという町の歴史を負っているからである。風景の中に西洋が巧く溶けこんでいる。それからもう一つ、これは軽井沢の一番軽井沢らしい所なのだが、この高原の避暑地全体が、明るい健やかさのなかになによりも青春性を感じさせることだ。

晩年の芥川龍之介にふいに少年の心を蘇らせ、室生犀星の青春の書ともいうべき『わが愛する詩人の伝記』を書かせたものも、やはりこの風土の持つ固有な特質であったのだろう。

いまは五月だったから、メーン・ストリートはひっそりしている。町なかの店はまだ大半が店を閉じたままで、そのところどころに夏のための改装や新築の工事が続いている。

町外れに近い昔のままのペンキ塗りの洋館のレストラン・デリカデッセンもまだ閉っている。神宮寺のしだれ桜の老木はもう花が終って、いまはレンゲ、ツツジが花盛りであった。町の中は



夏の軽井沢銀座

もの音もなく静まって郭公の声さえ聴えて来る。山門を出た所で、自転車の少女たちに道を訊かれた。聖パウロの教会に行きたいという。片手に印刷した地図を持っている。彼女たちはいちように自転車を乗り廻して名所めぐりをすることが、ここでの新しい流行になっているらしい。

そういう娘たちが、それこそおもちゃ箱をひっくり返したように溢れ出す夏は、ここが東山道、中山道といった時代の古い宿場だったことを忘れさせてしまう。

町を囲む森はいま新緑である。秋、紅葉の季節には燃えるような鮮かさになるのだが、ここでは、その紅葉の季節より、この新緑の若い緑の季節こそ、もっとも美しい季節なのだ。

軽井沢物語

たとえば、渋谷や神田で軽井沢の資料を見つけようとすると意外に少ない。せいぜい一般的なガイド・ブック程度である。

ところが中軽井沢の近くにある軽井沢資料館に行って見ると、案外、いろいろな形の案内書や資料があることは観光客たちには知られていない。

その一冊の佐藤邦雄氏の『軽井沢の花』(昭51・7、軽井沢三芳屋書店)などという本は楽しい本だった。夏だけ開かれる軽井沢新聞社刊のアンチック趣味のタウン誌『軽井沢辞典』も捨て難い。

そこで、各種のこの種の現地の刊行物を買い込んで、――というのはいつもの悪癖なのだが、帰ってからゆっくり読むことにする。なによりも、このあたりで軽井沢という町をもう一度、改めて調べなおして置きたかったからだった。

そういう資料の一冊の中に旧軽井沢のつるや旅館の先代佐藤不二男氏の遺稿集『軽井沢物語』(昭51・3、軽井沢書房)がある。A5判変型の升型フランス装本で、故人の一周忌に刊行された私刊本の一種であるが、表紙は著者自身が古い道中絵巻に倣って描いた墨絵淡彩の図絵を用いている。ひどく枯れたいい絵で、人柄がにじんでいるのがなによりいい。この一冊は古代から現代までの軽井沢史スケッチである。佐藤氏は昭和三十年から四十年まで十年間、軽井沢町の町長を務めた。そういう人の軽井沢私記といった本である。

その巻末の年表によると、軽井沢の歴史は縄文期まで遡れるらしい。昭和三十六年以来五回の発掘調査で解ったことだが、この旧軽井沢付近茂沢南石堂や、矢ヶ崎川上流からストーン・サークルが出て来た。このストーン・サークルは日本の南限である。縄文期の土器なども出て来ている。つまり太古からこの浅間高原は狩猟地として、そこに人びとが生活していたということである。

縄文人たちが、この高原を自由に走り廻って生きていたということは、どうも、現在の軽井沢と結びつけることが難しいイメージだが、この避暑地がそういう古い土地だったことは識っていても悪くあるまい。

軽井沢が古典の中に姿を現わす遙かな上代である。そういえば、碓氷峠の熊野神社は一説には日

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本武尊の勧請と伝えられる。その社殿の前に据えられた苔むした石の風車のなんとなくアルカイックな形にも、この明るく現代的な避暑地が、遙かな長い時間を歴史に刻んで来たという実感が湧いて来る。

しかし、私たちの知識の中にある軽井沢はそんな古代の軽井沢ではない。もっと時代を下った近世の中山道浅間三宿の一つの軽井沢としてのイメージがより強い。

佐藤不二男氏の地名考証によれば、軽井沢はかつて中村と呼ばれたという。現在ではこの地名は小字になって残っている。諏訪神社の森の裏、矢ヶ崎川のあたりが小字中村になっている。テニスコートから万平ホテルへ通じる道の矢ヶ崎川に架る小橋を中村橋と呼ぶのはこの小字に因んでいるわけであった。つまり、この中村地区が地域の村落共同体の中心部だった。その後、矢ヶ崎川の氾濫で、部落が流失して、現在の旧中山道に面した一帯に部落ぐるみ移住し、村の鎮守だった諏訪権現の社殿も南向きから北向きに変えられ、社殿の背後の小高い森の中に参道が新たに設けられ、森から階段を下ってという、普通とは逆な、——まあたいていの社なら、階段を登って、その奥に社殿があるものだが、そこがこの軽井沢の諏訪神社では逆になっているのは、この部落の移動のためであったという。

八月の二十日、このお諏訪さまの盆踊の夜に行きあわせたことがあって、夜店が祭礼らしく賑やかに店を並べていた。

表通りの都会風な賑わいと違ったいかにも田舎の祭りといった風情が珍しかったが、階段を下り

ていった低い所にある社殿が、そのときどうも奇妙な感じだったが、こうして軽井沢史を一読して見るとそれも納得がいく。このときから、中村は軽井沢と改称された。それは今から約五百年程昔のことであるという。その頃この土地一帯は豪族土屋左衛門重道の支配地だった。中世も終りの頃だといわれている。

軽井沢の地名語源はいろいろある。「軽石沢」あるいは「渇(か)れ沢」からの転訛説が一般的で、古代出雲語の「凍(こお)り冷(さ)わ」が語源という説もある。正しい地名は「かるいさわ」と澄んで読まれる。国鉄の駅名「かるいざわ」と濁音化されているのは誤用である。

国鉄山手線の「秋葉原」の「あきばがはら」を「あきはばら」としてしまったたぐいであった。

その軽井沢が宿場として急速に発展するのは近世に入って、参勤交代の制度が出来てからであった。中山道六十九次の十八番目の宿場で、碓氷峠を下って、矢ヶ崎川に架る二手橋を渡り、現在のつるや旅館の付近に石垣を築いた升形があり、ここから宿場であった。

元禄年間の古い記録に拠れば、宿場は上宿、中宿、下宿にわかれて五町十五間（約六百メートル）、御伝馬屋敷六十九軒、その後、現在のロータリー付近に新たに一町十間、御伝馬屋敷十九軒が設けられ、この狭い地域に人口一千四百四十二人（男五百九十五人、女八百四十七人）を数えた。本陣（佐藤氏）一軒、脇本陣（佐忠、江戸屋敷等）四軒、間屋一軒の規模の大きな宿場で、現在の軽井沢資料館になっている旧郵便局前あたりが本陣屋敷で、その資料館のあたりが脇本陣佐忠で

あった。

浅間三宿はこの軽井沢宿と沓掛宿、追分宿から成る。

沓掛は軽井沢、追分の間の宿で、ここから草津、北信に抜ける仁礼道の分岐点でもある。本陣と脇本陣三軒、間屋二軒、御伝馬屋敷六十四軒、宝性寺屋敷を併せて七十一軒。軽井沢よりも小さな宿場であった。

追分は浅間三宿のなかで最も栄えた宿場で、上代の官道東山道以来の要衝であった。宿場外れの升形を出ると、常夜灯の点る岐去れがあり、これから右は北国街道、左が中山道である。ここは本陣、脇本陣二軒、間屋一軒。その他旅籠屋七十一軒、茶屋十八軒。本町は五町、人口八百九十二人(男三百五十八人、女五百三十四人)、軽井沢よりやや小さな宿場であった。

この一帯は浅間山の爆発によるシラス(火山灰)の沖積による荒蕪の地で、農業生産力も低い。生活は必然的に農業よりも、参勤交代制度によって発達した宿場を中心とした交通、輸送業に頼らざるを得なかった。つまり、街道によって生活を依存していたのである。

碓氷峠は古代から上野国領と信濃国領の境である。京から下って、碓氷を越えれば、もうそこは東国であり、そこには京の文化圏と異るもう一つの文化圏が存在した。

京の人びとにとって、そこは道の果てであり、遙かな国でもあった。また、東国の人びとには、この峠を越えればそこは故郷の外であった。

日の暮に碓氷の山を越ゆる日は夫なのが袖もさやに振らしつ

と、これは『万葉集』の巻十四の「東歌」のなかの「上野の国の相聞往来の歌二十二首」の一首である。

防人かなにかに徴募され、東国から遙るばる都へ上って行く夫を思い、碓氷の峠を越えようとするその姿を眼に浮かべて詠んだ歌であろう。

女は峠を越えて行く夫の姿を見ているわけではあるまい。しかし、夕暮近い峠道をたどって行く夫の姿が、それこそ、いま見ているように思い浮かぶ。多分、夫は峠の頂でもう一度立ち止まり、昏れなづむ故郷の東国を振り返り、そこで私に、故郷に思いをこめて袖を振るであろう。そんな無名の女のいじらしい思いがこの一首となっているのだろう。

ひなぐもる碓日坂

是に、日本武尊の曰はく、「蝦夷の凶しき首、咸に其の辜に伏ひぬ。唯信濃国・越国のみ、頗未だ化に従はず」とのたまふ。則ち甲斐より北、武蔵・上野を転歴りて、西碓日坂に逮ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ情有します。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、「吾嬬はや」とのたまふ。嬬、此をば菟摩と云ふ。故因りて山の

東の諸国を号けて、吾嬬国と曰ふ。……

『日本書紀』巻第七の一節である。

古代からこの峠道は人の心を抒情させたのである。

ひなくもり碓日の坂を越えしだに妹が恋しく忘らえぬかも

右の一首は、他田部の子磐前のなり。

二月二十三日、上野国の防人部領使大目正六位下上毛野君駿河が進れる歌の数十二首。但し拙劣なる歌のみは取り載せず。

この『万葉集』巻の二十の「防人歌」の一首は前出の「日の暮に……」と並べて、昭和四十二年五月に、この峠の見晴台に歌碑として軽井沢町が建立した。

古代の人びとがこの峠を越えるごとに深い思いにとらえられたことを、この踏み固められた道の辺に偲ばされる。他田部磐前という青年が、この峠道を歩んだ。そして、東国を一歩出て、重い足どりで、故郷の妻に心を残してから下っていった。

この「ひなぐもる碓日」が現在の碓氷峠であったかどうかという考証は、これは郷土史家の課題であろう。私たちはただこの峠の歴史に埋もれた古代の人びとの美しいかなしさを思い起すばかり

である。

この峠は天候の変化が激しい。「ひなぐもる」は枕詞でなく、人がこの峠に立つ時、それはそのまま実感としていまに伝えられているような気がする。

しかし、この峠を登って来る観光のドライバーたちには、こういう情緒とは無縁のようだ。彼らはいつも、この万葉歌碑を一瞥しただけで、忙しそうに立ち去ってしまう。

はじめて、この峠を登って来た日は、深い秋霧の日だった。そして、今年、この峠は雨だった。新緑の大樹の梢でしきりに郭公が啼く。激しい雨足を避けて、道端の別荘のヴェランダで雨宿りをした。雫が薄みどりに染って、郭公が、その雨音のあい間に聞えて来る。沢のせせらぎの音が、ふいに近くなる。私はいま見て来た碑の万葉歌をもう一度、声に出さず口の中で呟いてみた。

峠を群馬側に少し下って、右折するとそこが碓氷川の水源である。豊かな湧水が峠を下って碓氷川になる。そこには尾崎咢堂揮毫の水神の碑と相馬御風の歌碑があるのだが、観光客はここまで足を伸ばしていないらしい。

水神の碑は昭和二十三年、軽井沢の製氷業泉喜太郎氏が建立したもの。

なり〳〵ておのれきよかる高山のこほりにうつる空の色かも

は歌碑の歌である。こちらは御風の筆になる。それは峠を下った軽井沢町とは全くといってよい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com